新善光寺 寺報 北 緣

2022年1月　Vol. 48

ほくえん

三輪高英

年頭所感

お檀家のみなさまにおかれましては、清らかな新春をお迎えのことと存じます。日頃より当山の護持運営にご理解を賜りますとともに、志をたむけてくださり感謝申し上げます。

さて、一昨年の令和２年２月末に、私たちが住まう北海道では、いち早く道独自の緊急事態宣言が出されました。それから刻一刻と状況は変化し、今に至っています。そのような中で、ときたま“悪疫”という言葉を目にしたり、聞くことがあります。たしかに、この度のウイルスにより世の中は難儀し、多くの悲しみを受けました。しかしながら、百年前、それよりはるか昔の千年前から、そして今私が生きている現在、さらに私が見ることのない百年後ひいては千年後という広く長い視野で物事を鳥瞰したとき、単なる“悪疫”という言葉で本質を把握できるでしょうか。「よしあしの　中を流れる　清水かな」この道歌が胸に響きます。自分に都合の良いこと（よし）や自分に都合の悪いこと（あし）がこもごもに起こる中を、清らかな水は、たださらさらと流れていきます。いつの世も悲しみのない時はありません。この一年、悲しみを通して、本当の幸せを感じられるよう、日々歩みを進めていきたいものです。

住職　太田　眞琴

前列左より　松尾一志（86歳）　太田真海（37歳）（副住職）　太田眞琴（73歳）（住職）
太田光顯（40歳）（清璋寺住職）　宗川信章（57歳）

後列左より　駒木根琴生（80歳）　立花俊輔（41歳）　佐古康祥（35歳）

〈今後の定例法要・行事について〉

皆さまのお宅へのお参りや法事（一周忌や三回忌など）は通常通りおこなっておりますが、新善光寺本堂でおこなう３月や９月のお彼岸や８月のお盆の法要に関しましては、昨年同様に形態を変えておこなう予定です。詳しくは後日ハガキ等でお知らせしますのでご確認いただければと思います。

また、法事などはオンライン（Zoom など）でもお受けすることができますので、遠方の方はそちらもご活用いただければと思います。

仏教講座「写経」は対策をして毎月第４土曜日におこなう予定です。次回は２月26 日の午後２時開催です。

秋彼岸法要の様子

写経の様子

〈納骨堂好評です！〉

およそ４年前に完成した新納骨堂ですが、陽当たりも良く、冬場でも暖かく広々とお参りできるということで地下の納骨堂やお墓から改葬される方も増えてきております。

エレベーターも完備しておりますので気軽にお参りできるかと思います。

２段型納骨壇（５霊位収蔵可能）が人気となっております。どうぞ、ご興味のある方はいつでも見学できますのでお問い合わせください。

総代さんに聞く

りんゆう観光　相談役
植田　英隆　様

総代とは……檀信徒（寺院を護持している人）の代表者。
檀信徒の中心となって寺院の運営をサポートする。

―元々の新善光寺との経緯というのは？

先祖は明治時代に九州から札幌に出てきました。私の記憶で申し上げると、曾祖父の代の時にお寺との縁ができたのではないでしょうか。私も物心ついたときから新善光寺の檀家という意識は持っていて、火災（昭和21年の札幌大火で全焼）にあわれた後に祖父と一緒に何度もお参りに行った記憶があります。また、生まれが4月8日（お釈迦様の生まれた日）になりますので、花まつり（お釈迦様の生誕を祝う行事）でお寺に行っていました。そういう体験が元になっております。

―総代として関わられたきっかけは？

祖父が総代をしていて、曾祖父も大変信仰心が厚くて、お寺や神社に対して気持ちを持ち続けていました。それから父の時は、いち檀家として関わりを持っていました。住職から総代をという話があった時は大変びっくりしました。全然心の準備も知識もないので対応できるという自信がなかったです。ですが、まあいいからいいからと言われ参画させていただきました。会議などに出て、非常にきちんとした運営を心掛けて、報告・確認・承認というステップをわかりやすくされている。ガラス張りの運営で、大変感心いたしました。

総代になってお寺に対しての認識、信仰に対しての認識は良い意味で前進しました。法然上人や親鸞聖人の本とかテーマにした小説などは目につくようになり、読むことを繰り返すようになりました。“浄土の信仰”とか、“浄土宗とは”などを知るようになり世界が広がりました。良い機会を与えられて感謝しています。世の中の色々な流れの中で、浄土宗の一信徒として目配りされて生かされているという気持ちを持つようになったのは、お寺との関わりを持っていたからこそです。

―今後、新善光寺に期待すること、こうあってほしいということは？

一言で言うと時代に合わせて頑張っていただきたいという抽象的なことになりますが、時代の変化を前向きに受け止めていただきたいと思います。総代としては、お寺にどっぷりと浸かったり、役職だから何とかしなくてはいけないという感じではなく、側面から支援するとか応援するとか背中を押すという役割だと思います。それを納得させていただければありがたく、新しい気持ちで取り組んでいるところを、檀家の方々や地域に理解していただくということを期待しています。未だに私みたいなものが総代でいいのかという気持ちは持ち続けておりますが、皆さんと力を合わせて邪魔にならないようにと心掛けております。そういう気持ちを持つことを認めていただけているのはありがたいです。

―りんゆう観光様について

相談役をされているりんゆう観光様は、大雪山層雲峡・黒岳ロープウェイやリフト、札幌藻岩山スキー場リフトなどの運営に加え、登山やトレッキングなどの特色あるツアーを道内はじめ国内や海外で展開されています。創業以来「よろこび　ひろげる」を合い言葉に、一貫して自然と関わりを持ち続けておられます。

Rinyu Corp.
株式会社りんゆう観光
TEL 011-711-7106　FAX 011-731-1456
〒 060-0909
札幌市東区北 9 条東 2 丁目
りんゆう観光　検索

シリーズ 仏事のおはなし

仏さまのおはなし ❷

新年あけましておめでとうございます。本年も新善光寺　寺報「北縁」をどうぞよろしくお願いいたします。

さて、前回は「仏さまのおはなし」の入り口までお話しました。仏教を開かれた「お釈迦さま」の呼び方などの話でしたが、仏教徒にとっては、どの宗派の方であっても、このお釈迦さまから始まっています。そこでお釈迦さまに関しては、少し詳しくお話してみたいと思います。

釈迦如来（しゃかにょらい） ❷

前回、人間で初めて悟りを開き、「仏」となった方がお釈迦さまです、とお話しましたが、では人間として生を受けたお釈迦さまは一体どんな人生を歩まれてきたのでしょう。

「天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）」

お釈迦さまの伝記にはいくつかの逸話があります。ご誕生は、紀元前５世紀ころ、古代インドの釈迦族（しゃか）（シャーキヤ族）の王子として生を受けました。父は釈迦族の王「浄飯王（じょうぼんのう）（シュッドーダナ）」、母は「摩耶夫人（まやぶにん）（マーヤー）」と言います。

母の摩耶夫人は、浄飯王のお妃となってから、長らく子宝に恵まれませんでした。しかしある日の事、天から六つの牙をもつ白象が降りてきて、夫人の右脇から胎内に入る夢を見て懐妊（かいにん）しました。

摩耶夫人は身ごもった子を出産するため、祖国に帰ろうとしていた道中、ルンビニ園という花園に差し掛かったときに産気づき、王子を出産しました。天地は悦びの声を上げて祝福したといいます。ときは四月八日のこと、春暖かなルンビニ園には花が咲きほこっていました。北縁 44 号の「年間行事のはなし」で「灌仏会（かんぶつえ）」のお話をしましたが、この行事は花が咲きほこっていた日にご生誕されたお釈迦様のお誕生を祝う法要で、「花祭り」とも言います。

王子は誕生した直後に立ち上がって７歩歩き、右手で天を、左手で大地を指差

したまま「この世に生きている人々は、誰もが人として尊いものである」という意味の言葉、「天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）」と言われました。浄飯王はとても喜び、「一切の願いが成就した」という意味で「悉達多（シッダールタ）」と名付けました。しかし喜びとはうらはらに、母の摩耶夫人は悉達多を出産した数日後に亡くなります。

「四門出遊（しもんしゅつゆう）」

浄飯王はアシタという仙人に悉達多の未来を占わせたところ、「この子が長じて家にいられたならば、偉大な王となり、出家の道を修めれば、世界を救う仏と成るだろう。」答えました。王は、悉達多を後継者として期待していたため、欲しいものを何でも与えて出家しないようにしました。

悉達多王子は、贅沢な暮らしと悦びにかこまれ、何不自由なくお城での生活を送っていました。ある時、お城の外の暮らしを見てみたいと思い、家来と共に城の東西南北、四つの門から出かけることにしました。

まず東門から出かけると、腰がまがり杖にたよった老人に出会いました。王子は、「あれは何者か？」と尋ねました。家来は「あれは老人です。人間はいずれ老いて、あのようになります」と答えました。次に南門から出かけると、道端に倒れている病人で出会いました。「あれは何者か？」と尋ねると、家来は「あれは病人です。人間はいずれ病にかかって、あのようになります」と答えました。次に西門から出かけると、今度は葬式の行列に遭遇しました。「あれは何か？」と尋ねると、家来は「あれは死者を送る葬列です。人間はいずれ死んで、あのようになります」と答えました。

最後に北門から出かけました。すると、出家者に出会いました。お城の暮らしのように欲を満たす生活とくらべると大変質素な身なりでしたが、修行の中に生きる姿を見て、「どんな人も老い、病にかかり、最後は死んでいくのか。それならば、人間は何のために生まれるのか。死んでいくと分かっていても、出家し修行することで、老い、病、死の苦しみから救われる道を目指すべきではないか」。そう決意して出家し、道を求める修行者となりました。

多感な青年、悉達多は、こうして王族として所有する全てを捨て、文字通り「家を出て」修行の道に進みます。（次号へつづく）

『源氏物語』と仏法

『源氏物語』の作者である紫式部の墓所（京都市北区）

昨年の11月に亡くなられた瀬戸内寂聴師は、『源氏物語の女性たち』の中で次のように述べています。「紫式部は、実に多くの女たちをこの物語の中で出家させてきましたが、どの女もその時、源氏に相談していません。出家をした瞬間、女の心の丈がすっと高くなるのを感じさせます。」寂聴師は、『源氏物語』の現代語訳をなされ、その講演も数多くされました。それらを耳にした中で、私がもっとも印象に残っている『源氏物語』の場面は、六条の御息所が自身の衣服についた芥子のにおいに驚愕するシーンです。御息所は、源氏（光源氏・光る君）より年上の女性で、教養も身分も高い方でした。

源氏の正妻である葵の上が、身籠りました。お産の際、大変な難産で葵の上を苦しめました。世間の人々は、御息所の生霊の仕業だと噂しました。葵の上の家では、その生霊（物の怪）を退治しようと、僧侶を招いて護摩を焚く祈祷がなされました。護摩を焚くときには、五穀などとともに芥子も火の中に投じられます。

御息所は、自身が物の怪となるなどつゆほども頭にありません。まさか自分がそんな醜態をさらすとは思っていないのです。しかし、現に自分の衣服、さらに髪にまで芥子のにおいがついて消えません。それは、祈祷が行われている葵の上の家に、御息所の魂（生霊）がさまよった証にほかならないのです。理性と情念の間で、御息所もまたもがき苦しんでいるのです。人と人が関わりを持つということは、愛する喜び愛されるうれしさと同時に悲しみや怒りをともなうのだと感じます。御息所も苦しみ、また葵の上も苦渋をなめ、そして源氏も苦難の道を行かねばならないのです。

『源氏物語』のこの御息所の情景を想うと、次の法語がしみわたってきます。「心を弘誓の仏地に樹て、情を難思の法海に流す」（『浄土文類聚鈔』）。私たちのころころと変わる心を、阿弥陀さまのすべての人を救いたいという誓いが成就したゆるぎない大地であるお浄土にしっかりと根をおろし、私たちの喜怒哀楽の情念を、思いはかることのできないほど深く広い阿弥陀さまのやさしさあふれる海に流すことができるのが、お念仏者の尊いところです。涙の私も、笑顔の私も、また嫉妬に苦しむ私も、すべての情を受け止めてくださるお方が、如来さま（阿弥陀さま）なのです。

〈文：立花　俊輔〉

ズッコケ尼さんの仏教こぼれ話㉙

〈阿弥陀さまにお任せして〉

駒木根（こまきね）　琴生（きんしょう）

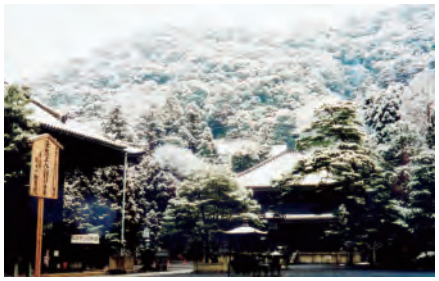
令和４年の新年、おめでとうございます。年を改めましても、引き続き仏教の教え「明るく・正しく・仲良く」を胸に、法然上人に準じてお念仏精進を誓いましょう。

高齢者の我が家の年末には喪中案内が増えだした。私同様に子に先立たれた報には思わず立ち尽くしてしまう。ふと、詩人・中桐雅夫氏の「きのうはあすに」の一節「新年は死んだ人をしのぶためにある／心の優しい人が先に死ぬのはなぜか／おのれだけが生き残っているのはなぜかと問うためだ」が甦り応える。特に忘れられない訃報がある。すでに十年程前の突然の千恵さんの別れだ。白血病二十歳の若さだった。近くの彼女は我が家の山の手文庫の常連だった。市内に図書館が一か所の状況を見過ごせず我が家を開放した。毎週土曜日午後になると、すぐに玄関は靴で溢れた。蔵書二千冊は決して満足ではない中、千恵さんは熱心だった。中学に入った頃、『星の王子さま（サン・テグジュペリ作)』を読み終えた後“おばちゃん、すごく面白かったわ”と笑い顔で話してくれた。彼女の笑顔に押されて読み返した。文庫棚の『星の王子さま』は昭和五十三年三月より多くの子供達に貸し出されていた。記述を見て感動した。内容に触れると、フランス人の飛行士が遥か上空より人間界を見下ろして、王子さまを捉えた。小惑星からやってきた純情な王子さまを通して子供の純真さを指摘した。冒頭で「大人は誰もが初めは子供だった」と表し、いつ迄も子供心を失わずにいる大人こそ真の大人であると強調した。ここでは文中の「大切なものは目に見えない」という言葉に注目したい。私達はつい目に見えるものを信用しがちであるが、お浄土を見た人はいませんよね。西方極楽浄土は阿弥陀仏が建立された処・煩悩一杯の私達を等しく救済せんが為に用意くださった処だ。その為に長い期間、厳しい修行を実行して下さった。その努力に報いるには只、只、「南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏」と、阿弥陀仏のお名前をお唱えする以外にありません。

「極楽へ必ず我は生まるべし　弥陀にまかせて　御名　となうれば」であります。

すでに二年余りのコロナ禍もワクチン投与の所為か出口が見えだした。しかし、まだ安心はできない。まだお寺の参拝も思い通りでない。本尊前で参拝できなくとも、遠く離れたところから参拝・遥拝の方法で乗り越えましょう。

ズッコケ増す中で、まだまだの溢れる気力に支えられて、もう少し前進したい（合掌）



総本山知恩院の冬景色

極楽もかくやあるらむ　あら楽し
とく参らはや　南無阿弥陀仏

浄土宗の総・大本山について

第１回目：知恩院③

三回に渡りましての総本山知恩院の紹介も今回で最後とさせていただきますが、一度立ち返って「知恩院」というお名前について説明したいと思います。

普段「知恩院」と言っておりますのはお寺の名前の「院号」の部分になります。どういう事かと言いますと、お寺の名称は全ではないですが、「山号」「院号」「寺号」の三つの部分に分かれます。知恩院も正式には「華頂山知恩教院大谷寺」という名称がついています。ここから通称として「知恩院」という呼び方が定着しております。因みに新善光寺も「北縁山新善光寺」という名称が付いています。

山号の華頂山、寺号の大谷寺は地名から来ており、知恩教院といのは法然上人がお浄土へ旅立たれたあと、遺された弟子たちが知恩講という名前で回向のため集まったのが由来となっています。

七不思議について

さて、知恩院には古くから伝わる「七不思議」というものがありますので紹介したいと思います。

まず、有名なのは「**鶯張りの廊下**」です。本堂である御影堂から集会堂等へ続くこの廊下は全長550メートルもの長さになります。足の動きに合わせ鶯が鳴くようにキュッキュッと音の出る事で防犯の意味もあります。

鶯張りの廊下

抜け雀

江戸時代前期の画家である狩野信政の絵も二つ七不思議に入っています。一つは「**抜け雀**」と言い、紅白の菊の花が書かれた襖絵、この絵には上部に雀が描かれていたといわれていますが、あまりにも上手に描かれてその雀が飛び去ってしまったというものや「**三方正面真向の猫**」というどの角度から見ても見るもの

三方正面真向の猫

を睨みつけてくるように見える猫が描かれている杉戸があります。

御影堂の正面右側の見上げた先の軒先に置いてある「**忘れ傘**」、廊下の天井にある重さ30キロ、長さ2.5メートルの杓子「**大杓子**」、境内にある石から瓜のつるが伸び、一日で実がなったという「**瓜生石**」、「**白木の棺**」と言われる三門を建設した大工が完成後、予算を超過した責任をとって夫婦で自刃したという菩提を弔うための白木の棺が三門に収められています。

いつでもご覧いただけるものや、拝観コース・特別公開時のみご覧いただけるものがあります。どうぞ知恩院にお参りに行かれた際は七不思議もご覧いただければと思います。

忘れ傘

大杓子

瓜生石

白木の棺

さて、次回は今年がご開帳の年でもあります長野「善光寺」を紹介します。

《清璋寺だより》

明けましておめでとうございます。

1月3日に恒例の「修正会並びに新春大祈願法要」を執りおこないました。昨年に続き、感染症対策のため餅つきはおこないませんでしたが、お参りの皆様方と共々に念仏を唱えました。良い1年になるように心から願っております。

どうぞ本年もよろしくお願いします。

住職　太田　光顯

2022年清璋寺法要予定
- 春彼岸法要：3月20日（日）
- お盆の法要：8月11日（祝･木）
- 秋彼岸法要：9月25日（日）

《納骨堂のご案内》

クラシカルなものから現代調など様々なタイプの納骨壇を用意しております。段々と残り少なくなってきていますので、ご希望の方は是非ご見学にお越しください。

西縁山 清璋寺　札幌市手稲区西宮の沢5条1丁目19-35

TEL 011-668-5110

慈啓会から

慈啓会病院「リハビリテーション室」のご紹介

当院は、藻岩山の登山口に近く緑に囲まれているため、リハビリテーション室の大きな窓からは正面に円山、眼下には敷地内の桜や紅葉が見渡せ、四季の移り変わりを楽しむことができます。

リハビリテーション部は、理学療法士３名、作業療法士３名、言語聴覚士２名の総勢８名です。主に、脳卒中後の手足や言葉が不自由になったり、飲み込みにくくなった方、骨折後の機能障害、ご病気後に一定期間安静にしていたことにより機能が低下されている方々に関わらせていただいています。

長期療養をされている方が少しでも安心安楽に過ごしていただけるよう支援するとともに、ご自宅や施設から入院され、再び元居た場所に戻るためのリハビリテーションを行っています。

お示しした理念の下、患者様及びご家族の思いに寄り添いながら、取り組んでまいりますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

リハビリテーション室の理念

・動く喜び　・食べる喜び
・話す喜び　・希望を持つ喜び
の実現を目指します。

① 一人一人と向き合い、寄り添うことで個人を尊重したリハビリを目指します。
② 心と身体の障害を理解し、QOL の向上を支援します。
③ 常に目的意識を持ち、自ら学び、向上していくことに努めます。

社会福祉法人札幌慈啓会　慈啓会病院
札幌市中央区旭ヶ丘5丁目6番50号
TEL 011-561-8292

札幌慈啓会総合相談室のご案内

0120-83-8291　相談無料

お電話受付時間／8:45～17:00（土日･祝は除く）　E-mail info-jk@sapporojikeikai.or.jp

専門スタッフが保健・医療・福祉などのご相談に応じます。
病気や加齢は様々な生活上の障害を産み、時には介護や看護を必要とする場合があります。ご心配やお困りのときはお気軽にご相談ください。ご相談の内容は秘密厳守いたします。

当山のお仏像を紹介します⑤

増長天（ぞうちょうてん）

当山本堂の須弥壇（しゅみだん）の四隅には、四天王をおまつりしています。むかって左奥の赤いお顔をしているお方が今回紹介する増長天（ぞうちょうてん）です。増長天は、四天王のうちの一尊で、南の方角を守護しています。『観無量寿経（かんむりょうじゅきょう）』には、韋提希夫人（いだいけぶにん）が悲しみのどん底にある時、お釈迦さまは尊い姿をあらわしてくださいました。その際、四天王（護世諸天（ごせしょてん））も虚空（こくう）におられたとあります。嘆き悲しむ私たちが、真実の道を歩もうとする時、四天王などが静かに私たちを見護ってくださるのです。

～まもられて　ねがわれて　今ここに～

同封の年回忌表の上に書かれている言葉について解説します。

如来さまに“まもられる”ということは、どのようなことなのでしょうか。病気をしない、災難にあわない、自分の思い通りに事が運ぶ…ということでしょうか。いいえ、如来さまのおまもりとは、決してそういうことではありません。

善導大師（ぜんどうだいし）は『観経疏（かんぎょうのしょ）』の二河譬喩（にがひゆ）の中で、「我（わ）れ能（よ）く汝（なんじ）を護（まも）らん」と如来さま（阿弥陀さま）が私たち念仏する者を護ってくださるとお示しです。しかしながら、私たちの煩悩にたとえられる火の河と水の河は、厳然として消え去ることはありません。ただ、その火の河と水の河の中間にある白い道は、確実に如来さまの御国（みくに）である極楽浄土につながっています。如来さまに護られるとは、苦しみや悲しみが消えてなくなるということでなく、苦難や悲哀を通して、本当の幸せを感じることなのです。

如来さまが“ねがわれた”すべての人を救いたいという四十八の誓願をかみしめつつ、“今ここで”私がお念仏申す一年にしたいものです。

北縁　なんでもＱ＆Ａ

いつもご質問、感想等、ご投稿いただきありがとうございます。

さて、新善光寺　寺報「北縁」も48号目の発行になります。この「48」という数字は、私たち浄土宗徒にとっては大切な数字で、それは「阿弥陀如来の誓願」の数だからです。阿弥陀さまはこの48の誓願を達成して仏と成られました。という事で、私たちにとっては満数というような数字ではありますが、この寺報では皆さんのご質問を49号以降も募集しています。ご投稿、ご質問、引き続きお願いします。

Q　親戚の家は浄土真宗なのですが、「ダンカ」と言わず「モント」と言っています。違いは何ですか。

A　ダンカは「檀家」、モントは「門徒」の字が当てられます。我が宗では法然上人の説いた専修念仏の教えを信仰する信者さんのことを「信徒」と呼びます。そして、信徒さんの中でも継続的にお寺で仏事をいとなむ方のことを「檀徒」もしくは「檀信徒」と呼称しています。この「檀」の字ですが、梵語の「ダーナパティ（漢字で「檀越」と表記）」のことで、「布施をする人」を示す字として使われます。

仏事を行うとお寺にお布施を納めますが、そのお布施によって寺院が成り立っている、いわばお寺の維持を支えてくれている信者さんのことを「檀徒（檀信徒）」と言います。そして、そのことを「家」単位とするのが「檀家」ということになります。ちなみに昔は一家の家長のこと、またはお店の主のことを「旦那さん」と呼んでいたのも、同じ「ダーナ（施し、施す人）」からきていると言われています。

一方、「門徒」とは、真宗教団（一般的に十派）における信者さんのことで、親鸞聖人の書物に出てくる「一門の徒輩（同じ宗門の仲間）」という言葉から生まれた言葉です。浄土真宗の考え方は、個人の信仰による救いが、家の救いにつながるという思想から檀家という家単位で信者さんを呼称することをしなかった歴史があるようです。そして、信者さんすべてが、個の寺にとっての信徒ではなくて、宗門の大事な個人であるという意味で「門徒」と呼んできたといわれています。

さて、檀家は前述の通り、信者さんを家単位でみる呼び方ですが、これは江戸時代の禁キリスト教政策から生まれた檀家制度によるものです。キリスト教信者でない証として、どこかのお寺の檀家台帳に記載されることが必要な時代でもありました。現在は「信教の自由」のもと、その家が継承してきた宗派の教義のもとに先祖崇拝（供養）を行う習慣から、「うちのお寺は○○宗」といった形で檀家制度が成り立っています。

ご質問の結論としては、檀家も門徒も同じお寺、宗門を支えてくれる信者さんのことを示しますが、中身についての定義が違うことになります。ちなみに真宗以外のほとんどの宗派が信者さんのことを、「檀家さん」と呼んでいます。

〈除夜の鐘、皆さんと撞くことができました！〉

大晦日の除夜の鐘は２年振りにお檀家様はじめ、一般の方とも一緒に撞くことができました。年末にSTV（札幌テレビ放送）さんの「どさんこワイド」でも宣伝していただき、それも呼び水になったかと思います。皆さん思い思いの鐘の音と共にする年越しも良いものですね。YouTube でも公開していますので是非ご覧ください。

東京別院　霊源寺から

霊源寺では東京近郊にお住まいの新善光寺檀信徒の皆さんのご供養を承っております。一周忌や三回忌などの法事やお盆参り、葬儀なども伺わせていただきます。また納骨堂もありますので、もしご希望の方がおられればお気軽にお問合せください。

大光山 霊源寺　受付時間 9:00〜19:00　毎日見学受付中

東急目黒線・不動前駅　徒歩7分（桐ヶ谷斎場真向かい）
〒142-0063 東京都品川区荏原 1-1-2 FAX:03-3494-6319
TEL:03-3494-1083　大光山霊源寺　検索

編集後記

大変遅くなりましたけど、明けましておめでとうございます。どうぞ本年もよろしくお願いいたします。今回のお檀家さん紹介ページはいつもと体裁を変えてインタビュー形式にしてみました。文章にまとめるのが不慣れなもので、それで発行が遅れてしまったのが悔やまれます。今回お話を伺って、あらためて多くの方々に新善光寺は支えられていて、非常にありがたいことだと実感したところです。

次回は５月中旬に発行予定です。アンケートはがきにてご感想をお待ちしております。（真海）

※新善光寺の日々の情報は各種 SNS にて公開しております。どうぞ、そちらもご覧ください。そしてこの「ほくえん」のご感想もお待ちしております。

新善光寺　検索

ホームページ　YouTube

新善光寺寺報 Hokuen 48
北縁

発行／2022 年 1 月発行
発行責任者／新善光寺住職 太田眞琴

〒 064-0806 札幌市中央区南 6 条西 1 丁目　［TEL］011-511-0262　［FAX］011-511-4706
［ホームページ］http://s-zenkoj.com　［Eメール］s-zenkoj@crux.ocn.ne.jp